

■ミニシンポ

「身体文化としてのオリンピック・パラリンピックとダンス」

真田 久 (筑波大学)

神原健太 (車いすダンサー)

鴫田光晴, 齊藤コン (ダンスユニット「O.F.F」)

司会・進行: 村田芳子 (平成国際大学)

村田: 本企画の最後は、本日の演者4名の方に再度登場していただき、テーマ「身体文化としてのオリンピック・パラリンピックとダンス」について、それぞれのお立場からお話しいただき、フロアとのやり取りも含めて、何か新たなヒントや可能性を探っていきたいと思います。進行は村田がさせていただきます。よろしくお願ひ致します。

まず、真田先生にはこの舞踊学会のために色々準備して下さって大変だったかと思うのですが、その中でオリンピックとアートとの関係について改めて気づかれたことがあれば教えてください。

真田: オリンピックそのものの歴史を考えてみますと、スポーツの祭典ではなくてやっぱり文化とスポーツの祭典なのだとこのことを改めて確認できたと思うんですね。古代から、極めて密接な関係、今以上に密接な関係で、そこから人類の文化としてのオリンピックが誕生して、それが1200年間という長い間続いてきた。現代はまだわずかに120年しか経ってなくて、古代から比べたらまだ10分の1の期間でしかないのです。パッハ会長もオリンピック文明について相当深刻に考えていらっしゃるって、ひょっとしたらオリンピックがなくなってしまうんじゃないかという危機感を持っています。それは、招致に手を挙げる都市も少なくなってきたり、莫大なお金がかかるということ、また、テロからどうやって守るかということですね。開催都市にかかる重圧、財政の問題も含めて大きな問題であって、これをなんとか和らげたい。そのためのオリンピックムーブメントを展開したい。それには、社会から認められるオリンピックにしたいということ。社会からスポーツする価値を認めてもらえるということは、人々が共有する価値というものを持たなくてはならない。それには、スポーツが文化や芸術の中で生かされていかなければ長続きしていかないので、やはり文化や芸術の中へ溶け込んでいった古代というものを見据えていくというか、そういう視点は大事なんだなあと思感いたしました。そうすれば新しい文化が次々と生まれると思いますけどね。

村田: 先生のお話を聞いていて、古代オリンピッ



クではスポーツとアートが融合していたという、むしろ文化人がスポーツを育成していたという話がすごく興味深かったです。レオナルド・ダ・ヴィンチも画家なのに科学者だったり、一人の中に多様なマルチな力があって、そういう人たちがスポーツを育てて、いつの間にかスポーツが追い越して、あるいは、アートの方が並べないなあと思って離れたのか、そうして分化したスポーツとアートが、今またリンクしようという動きなんですね。

真田: そうですね。オリンピックムーブメントはもともとは文化の一部としてスタートしているのですが、そのうちスポーツと文化はそれぞれ離れて、それぞれ独自に発展していきながら、やはりまたお互いに必要性を感じていくという、そういう流れもあるかと思いますね。そう考えてみても古代で様々な文化人がスポーツ、アスリートを諫め、もっと美しさと品格をという理想の方向に啓蒙した。アスリートの理想像も、おそらく当初は単なる力持ちなどでしたが、ある時から非常に均整のとれた肉体と品格を備えた人物像がアスリートの理想として描かれていく。そういう古代が描かれていくと同時にそれを目指して人々は努力していくということですね。そういうことがまさに文化と芸術が融合していたがために、文化と芸術がスポーツを育成してきたと言えると思います。

村田: 今もスポーツをめぐるドーピングだとか、勝ち負けにこだわりすぎてとか…。スポーツの競争と勝敗はともすれば狭く、傲慢な人間性にもつながりやすい、中途半端なアスリートを相手にすることも多いのでそう感じるのですが、それを軌道修正する力も文化にはあると思いました。スポーツももっと多様でしなやかであるべきだと。真のアスリートたちは皆優れた人格者ですね。

真田: スポーツと文化が融合すると、メッセージ性がすごく高まるなあ今日のパフォーマンスを見て思ったんですね。例えば東京2020の理念の中に「多様性と調和」という言葉があるのですが、これは色々理屈をつけて述べるよりこういうパフォーマンスで魅せられるとこれを見ただけで「ああ、そういうものなんだなあ」と、言葉はいらないという気がしますよね。そういう力を身体

文化は持っているということを感じました。

村田：先ほどの神原さんの作品は、「普通になれなくても、特別にはなれる」というのがテーマだったんです。神原さんの言葉の中に「出来ないことがダンスでは個性になる」という驚き、ダンスを始めた時のですね。

神原：そうですね。例えば僕のソロのシーンの中に、変形している脚をわざと見せるシーンを入れたのですが、それってこう変形している脚と違って普通の生活では、基本的に長ズボンはいて隠す方に向くのですが、脚をあえて見せることで、見ているお客様にドキッとさせて考えてもらうきっかけになればと、わざと見せることもしますね。

村田：それって、本当はすごく不便なことやすごく苦勞されて、それでダンスに出会って世界がすごく広がったんですね。

神原：そうですね。僕自身は色々なスポーツをやってきて、水泳とか、パラリンピックの競技にもある座ってやるシッティングバレーボールだったり、卓球に陸上とやってきたんですが、あまりバツとしないで、そして勝負事なので、負けず嫌いで悔しいんですけど、ダンスだったら単純に順位とかでもものではないのでそういう意味ではよかったです。僕は幼稚園の時から逆立ちができたのですが、そういうのを生かして人に見てもらうきっかけになるんだなあ、ダンスってそういう要素があるって考えたことがなかったので面白いと思います。あと、僕、最近ではパラリンピックの教育っていう枠で喋るといことで小学校とか中学校とかに行かせていただいているのですが、3、4分踊るだけでも小学生たちワーワー盛り上がってくれて、ダンスを見たこともないし、障がい者と喋ったこともない子がほとんどなのでちょっと踊るだけですがごく距離が近くなる。で、子供たちの質問の中になんで脚が細いんですか？太くならないんですか？とか、一輪車乗れますか？とかすごい友達みたいに喋れて色々聞いてくれて…。なんか健常者の先生が1時間障がい者について喋るよりも意味があって、且つ、ダンスっていうものを通して多様性とかを身をもって感じてくれるんじゃないかなあって、ダンスの力ってすごいなあって実感しているところです。

村田：ありがとうございます。反応のメッセージなどでかわいそうとかありますか。

神原：そうですね。メッセージとかでかわいそうとか思っていたけど、楽しそう、一緒に踊って楽しかった、また来てください…とか、はい。

村田：先ほどもどなたかが言っていたように、小さな障がいってきつとみんな持っていて、でも目に見えにくい。でも、大きな障がいを持っている人は個性にまで変えちゃう潔さというか、すごいなあ。きつと一緒に踊られて、個人の中の多様

性というよりはいろんな人が一緒になるっていうところがまさにダンスですね。そこに常に一緒におられて感じていることが何かありますか。

鶴田：そうですね。多様性ということに関しては、例えば今インテグレーションとか包括的っていう意味だったり、まあやっている身からするとあまり変わらないというか、あんまり気を使って先回りすると逆に怒られたりするの（笑）。だからあまり気にしてないですね。振付をする時とかも、人として馬が合うかどうかというところでやっていますね。僕、6年位前に適応障害というふうに診断されまして、ちょっと精神的に辛かった時期がありまして、そういう意味で、今踊っているメンバーって車椅子かそうでないか言ってしまうえばバリアフリー止まりなので、多様性があると行っていただけることはすごく嬉しいですけど、もっともっといろんな人を巻き込んでいかなければいけません。このままのペースで好きなことをやり続けられたらなあと思います。

村田：斎藤さんはいかがですか？

斎藤：先ほど神原さんがおっしゃっていたところに先にて、耳が聞こえないとか、ダウン症の子たちと一緒にダンスのパフォーマンスを創ろうというプロジェクトに関わっていました。そこに神原さんが半年くらい経って入ってきてから、車椅子の方、義足の方とやっていく中で、普段の生活ではそんなにいっぱい触れないような人たちとやっていると、例えば耳が聞こえない人たちは、聞こえないという感覚を持っているともいうし、ダウン症の人たちって、社会っていうよりも自然にひらかれているっていう感覚を持っている人が多いたんだなあということに最近気づいて、そういった人たちにフォーカスできるようなプロジェクトがこれから広まっていけばいいなあと思っています。あと、ここ数年でSNSが爆発的に広まってその中で衝撃を受けたのは、目の見えない方が雪上をスケボーで滑走するという、違う感覚を持ってどんどんトライしていくっていうのが、ダンスに限らず、これからたくさん見れるんじゃないかと私も楽しみにしています。

村田：神原さんのお話から多様性っていうキーワードが出ましたが、違っていいのよというか、違っていいっていうことを乗り越えた人たちって素晴らしいなって思います。私も目が見えない人たちとか、耳の聞こえない人たちの踊りを見るのですが、見えない・聞こえないからこそ他の感覚がより鋭くなるから、健常者にはつかみにくいギリギリ感があるから感動する。一番問題なのは五体満足の人たちで、からだの感覚が接触不良で感性が磨かれていないっていうもどかしさを感じています。そういった時に、近代スポーツは本当にシビアに高みを追い求めていたじゃないで

すか、多様性を排除して。でもパラリンピックが出てきたとき、全部変わりましたよね。パラリンピックは新たに考える契機になると思います。スポーツに個性とか多様性ってあるんでしょうか？
真田：やっぱり、近代スポーツの方向性はひとつの価値観のルールをもとにしてやってきたのでむしろ多様性をそぎ落として最小限みんながまとまれるところだけを求めてやってきたと思うんですよね。それがパラリンピックが出てきたことで、もっと人間のサイドからスポーツを見つめ直そう、そのような動きになってきたのかなあと感じます。これまでは、国際的なスポーツのルールがあってそれにみんながついてくるという方向だったのが、やっぱり多様な、あるいはアダブテッドという概念ができたことによって人間がそれぞれの状況に応じたスポーツの在り方を考えていこうという点での変化は大きいと思うんですよね。

村田：今や超高齢社会で、生涯スポーツとして実際に地域で、高齢者を相手に運動をやっていくので、競技スポーツだけでは絶対いけないとわかっているのに、一方でスポーツイコール競技っていうイメージはまだ根強い。でも、明らかにそこは変わっていきますよね。

真田：そういう方向にいくでしょうし、やっぱり日本では高齢者のスポーツというのがとても大きく取り上げられていますね。また、IOCも「アジェンダ2020」っていう新しいムーブメントを示した中で国際マスターズ大会との連携を考えていこうということを明確に言っていて、オリンピックの翌年か、近い年に開催できるようにという提案をしているんですよ。日本では2020年にオリンピック・パラリンピック、そして2027年に大阪で国際マスターズ大会があります。そういう意味でも、多様なスポーツをオリンピック・パラリンピック、そしてマスターズ大会を通して広めていくことが非常に重要な視点になると思います。

村田：ありがとうございます。この辺でフロアの皆さまの中で、それぞれの方に質問や意見などありましたらよろしくお願ひします。

フロア1人目：神原さんとお二人に、「こういう動きはできるかやってみてくれる？」というようなことが作品を創る上であるのでしょうか。またその逆もあるのでしょうか？お互いの可能性の探り合いがクリエーションの中であるのだろうか？ということを知りたいと思います。意外と発見があるのではと思うので。

神原：まず、今回創った作品は鴫田君が大まかな枠を決めてその中でちょっとずつパーツを創っていくっていう感じで、その中でこういうのができるようになったり、逆にこういうのができる？って聞かれてできたりできなかったりという感じで、結構自分から提案したりしないとこの二人には想

像できないような振付ができたりするので、障がい者自身が提案していくっていうのがオリジナリティーのある作品を創る上では結構重要ななと思います。あと、僕の場合、所属しているカンパニーの方から言われて空中ブランコにチャレンジしてみたりしています。そういうのも、自分自身で提案して新しい振付だったり、他の方からこれできる？って言われてとりあえずチャレンジしてみてもそれがパフォーマンスになったりと両方の面があると思います。どちらもお互いの特徴を分かった上でこういうのできる？ってなるので、急に会ってこれできる？って言われてもダメですね。なので、ある程度の時間をかけてお互いの身体を知って行って挑戦するっていう振付が多いかなという感じです。

フロア1人目：はい。今日午前中に非常に濃い中身の研究発表を3つ見まして、舞踏の人の身体について言葉をベースに探り合うようなのがあって、それに触発されて質問させていただきました。非常にいいなと思います。これからも頑張っていたきたいと思います。

神原：ありがとうございます。

フロア2人目：オリンピック・パラリンピックにおいてのダンスとはどのようなものなのか。ダンスの位置というか、存在はということですね。要するに、オリンピック・パラリンピックの開会式、閉会式のパフォーマンスとして盛り上げるという役割も当然あると思うんですけど、それだけなんだろうか？違うところもあるのだろうか、真田先生、文化プログラムとしての存在はということもお話いただきましたがそれだけなんだろうかということですね。そんなことをいつも疑問に思っておりまして、進行の村田先生でも構いませんし、真田先生もなにかお考えがあればお聞かせください。

村田：それが、なかなかずっと繋がらないので、開閉会式のダンスしか浮かばなくて、でも本当はもっと違う可能性があるのではと思っています。本日、古代は文化人がスポーツ選手を育て、あるいはスポーツが曲がっていきそうなところを軌道修正していたという話を聞いて、目からうろこの感じがしています。もっとダンスにできることがあるのではないかと…。そこには、まさに今、体育という言葉が社会や大学から消えてしまい、全部スポーツという名称になり、教育の側面が置き去りにされていくような危機感を感じています。今のところ小中高の教科名として体育の名称が残っているだけです。こうした中で、非競争のダンスとか体操とかは入ってこない。これからはそういうのも全部含めてスポーツなんですよって説明して、体育の教育的な側面も大切にしていかなければならない。学校の体育の中には確実にダン

スが入っていて、そしてダンスはスポーツの中でどのように関わるか、存在していくか、本当に今、この年になって悩んでいるんです。逆に、ダンスの人間がスポーツの場で役に立つとすれば、それはしなやかで、多様で幅広い力を持った指導者を育てること。ダンスの持つ多様性や個性を大切に発想をスポーツの中に生かしていく…。本日の古代オリンピックのスポーツと芸術の関係と重なりました。スポーツの中にダンスという異質なものを注入して、ピュッとさしたらパーッと化学反応を起こすことかなあ。つい長くなりました。すみません。

神原：いいですか？ 僕自身がダンスによって色々変わっているのを感じていて、例えば、ダンスを全く見たことなくして障がい者と喋ったことない人の前でパフォーマンスしたら、ダンスに興味を持ってきて公演に来てくれたりします。パラリンピックっていう機会がなければ僕も大きな舞台で披露させていただくことなんてなかったのです。例えば僕は武道館でソロを踊らせてもらったりしましたが、そうやって、見てもらう機会がないはずだったのに、パラリンピックっていうイベントの中のパフォーマンスをすることでダンスを初めて見て、面白いって思ってもらったり、障がい者っていうものに興味を持った人が僕に直接声をかけてくれるのを非常に感じています。また、ワークショップなどでダンス経験がない人と踊ったら、その人のコンプレックスがある部分とかも、障がいってわかりやすいコンプレックスだと思うのですが、そういうのを認めて生活していった方が幸せなんじゃないかって…。そういう意味でダンスって活躍できる場面がたくさんあると思います。なので、コンプレックスを和らげたり、アートが盛り上がる機会だったり、高齢者も声かけくださったりする。それは、社会に身の回りに障がい者がいるんだってことを知ってもらうきっかけになってバリアフリーが進んだり、社会を変えるきっかけになるという意味でパラリンピックっていうのはすごく意味があるんだなって思います。

フロア2人目：真田先生が中心にやっていらっしゃるの、オリンピック・パラリンピック教育ですよ。これは国際交流っていう大きなテーマがありますけれども、そこにはやっぱり、もっとダンスを変革していただいて、様々なダンスがある、世界の国々に初めてこんな踊りを見たよって子供たちのためにもダンスを大いに活用していただきたいと思いますし、障がい者の方々、子供たちに触れればかなり刺激を与えられると思いますし、ここにいる先生方、ダンスの先生方、オリンピック・パラリンピック教育の中に是非入っていただきたいと思います。

真田：ありがとうございます。

村田：力強いエールをありがとうございました。
フロア3人目：こういう例を一つ。良いか悪いかは別です。うちの娘がロシアの方で大学卒業の際に、日本的なダンスをやってくれと言われました。何をやったかという、黒田節を踊ったのと、童謡のまちぼうけをバレエにして踊ったこと。ちなみに卒業したのはバレエの学校です。ただし、ロシアの場合は、子どもの時から20歳になるまでロシアンダンス、その他のスポーツも全部ダンスとしてやって、そこから専門に振り分けられます。もう一つ、舞踊の価値は自分たちで見つけるといって、本日の皆さまを見ていて、その新しい価値観を私は認識しました。ありがとうございました。
フロア4人目：健常者が、健常者じゃない人のことを羨ましく思うようになると舞踏の始まりですっていうのがあるんですね。土方巽という舞踏を始めた人ですけれども。うちの旦那は、先ほどのパラリンピックのショーもそうですけど、見た時に大喜びしちゃって、これは素晴らしいじゃないか、本当にダンスは素敵だ。こういうのが世界中に発信されて、土方巽が言っていること超えちゃってるねってすごい大騒ぎして見ていたんですよ。だからこれを続けてほしいなあと思います。すごく色んなことを含めて素晴らしいって感じております。以上です。

神原：一応2020年の先の話をする、2025年、大阪万博でも関わらせていただいております。なので、その先も色々声かけていただいております。
フロア5人目：私は伝統的な舞踊が専門なのですが、神原さんの動きを村田先生が「天使のような動き」と言われたことに同感したと、私どもの大学に全盲の子が2年前に入ってきました、すごく元気のいい子なんですよ、今回このような機会を与えていただいたことで、その子の可能性もすごく感じられました。他の学科でも車椅子の子が4年生で元気に通っていて世の中がバリアフリーになっていくことがまた新しい日本の未来を拓いていくのではないかと思います。それを身をもって今日はわかった企画でした。ありがとうございました。

村田：話は尽きませんが、残念ながら時間となりましたのでこれで終わりにさせていただきます。改めまして今日講演とパフォーマンスをしていただいた4人の方に大きな拍手をお願い致します。本日は本当にありがとうございました。

* 本稿はテープ起しのデータを基に、村田がまとめました。テープ起しをしてくださった筑波大学の学生さんに心より感謝いたします。